

# 「シャクヤク」

廣瀬清一 事務局



新聞のコラムに「都々逸」の文字を見つけた。

都々逸は、七七七五の二十六の音数で、俳句の十七音、短歌の三十一音とは違った響きがある。

都々逸は江戸末期に寄席芸人・都々逸坊扇歌(どどいつぼう せんか)が始めたもので、昭和の中頃までは寄席には欠かせないものだった。男女の色恋や時局の批判を粹に三味線に合わせ唄い、たいそう流行したという。内容は現代にも通ずるものも多い。よく耳にする「立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は百合の花」これも都々逸だという。

ところで江戸末期に成立した都々逸よりも前に、この歌詞の原型がある。

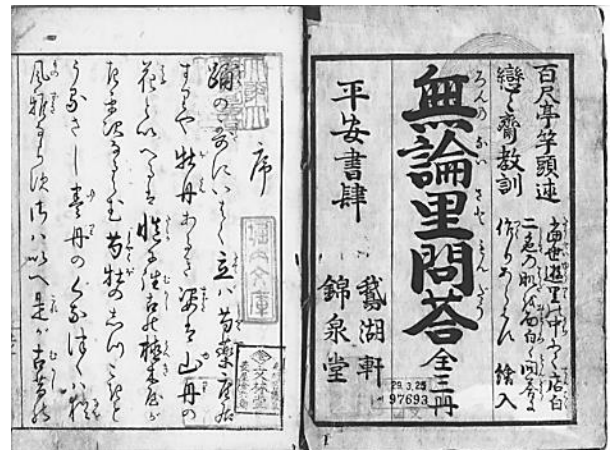
ことわざを集めた『無論里(ろんのないさと)問答』の序文は、「踊の歌にいはいく 立ば芍薬 座居(とい)すりや牡丹 あるき姿は山丹(ゆり)の花」とあり、もともとは舞踏歌に発したもののようである。作者はわからない。その後の『譬喩尽(たとへづくし)』では、「立てば芍薬、居(とと)すりや牡丹、歩行(あるく)姿は百合の花」となっている。

こうして少しずつ言葉を変えながら、今日の我々が知るところのこの歌詞になったようだ。

一般的には、「美しい女性の容姿や立ち居振る舞いを花にたとえて形容した」ものとして、秀外惠中や才色兼備と同じ意味に使われる。

ところが、興味深いことにいろいろな解釈がある。

「芍薬はまるで美しい女性が立っている姿のよう、牡丹は美しい女性が座っているよう、百合は美しい女性が歩く姿のようだ」という解釈、「芍薬はすらりと伸びた茎の先端に華麗な花を咲かせ立って見るのが良く、牡丹は枝分かれした横向きの枝に花をつけ座って見るのが良く、百合は風を受けて揺れ歩きながら見るのが良い」という解釈、そして、芍薬、牡丹、百合はいずれも生薬として使われ、「気の立った女性には、芍薬の根で癒し。血液がお腹に貯まり苦しみで座っている女性には、牡丹の根で治し。頼りなさげに細々と歩く女性には、百合の球根で元気づける。それぞれの症状に合う生薬を表している」などなどの解釈がある。



『無論里問答』 (国文学研究資料館)

「踊の歌にいはいく 立ば芍薬

座居すりや牡丹 あるき姿は山丹の花」

生薬の芍薬は、葛根湯、十全大補湯、芍薬甘草湯、大柴胡湯、当帰芍薬散、四物湯など多くの漢方方剤に配合されている。



『芍薬群蝶図』伊藤若冲(宮内庁三の丸尚蔵館)  
(東京芸術大学美術館 展示予定 8/30~9/25)

さて、花に話を戻と、中国では花が大きくデリケートで形も色も非常に変化に富む牡丹は、その豪勢な花姿から「花王」もしくは「富貴花」と呼ばれ、富貴と繁昌・繁栄の象徴として親しまれ詩歌、工芸美術、絵画、図案の題材になっていた。牡丹から約一か月遅く花が咲く芍薬は牡丹と花の形がよく似ている。牡丹の「花王」に対して芍薬は「花相」と呼ばれ同じように愛好されてきた。

牡丹(木本性)も芍薬(草本性)も、ボタン科ボタン属の植物である。芍薬の学名は *Paeonia lactiflora* で、*Paeonia* ペオニアは、ギリシャ神話の神々の医師 Paiōn パイオンに由来する。*lactiflora* ラクティフローラは乳白色の花を意味する。

英名では牡丹はツリーピオニー(Tree peony)、芍薬はチャイニーズピオニー(Chinese peony)だが、欧米では両者を単にピオニーと呼ばれることが多い。

芍薬は、平安時代に薬用植物として中国より伝わったとされる。江戸時代には、観賞用として盛んに品種改良された。

最近では、ボタンとの種間交雑がなされ品種数も多く、フワツとした「八重咲き」、凛とした「一重咲き」、雄しべが変化した「金しべ咲き」、「翁咲き」、「冠咲き」があり、また白、ピンク、深紅、赤紫、黄色と形、色共に多様である。

芍薬の花期は5~6月で、花屋でも生花はこの時期にしか手に入らない。花径8~13 cmほどと大輪であり、生花の大きな丸い蕾を開花させるには少し技術が必要だとある。一方、牡丹の生花はほとんど扱われていない。

芍薬の花は、ロージーグリーンの香りがする。バラより爽やかでみずみずしく、透明感のある優しくふんわりと甘い香りがする。華やかさの中にバラとは違った楚々とした印象がする。種類によっては、キクや粉葉のようなニュアンスを持つものがある。

さてと。

三味線のチン トン シャンの音と共に都々逸を味わって、少し心に潤いを頂きましょうか。

こうしてこうすりゃ こうなるものと

知りつつこうして こうなった(都々逸坊扇歌)

嫌なお方の 親切よりも

好いたお方の 無理が良い

花に浮かれて 来る蝶々も

風が邪魔する 世のならい

香りゆかしき 蕾の梅も

やがて開けば 散る浮き世

#### 参考文献

- 1) 江川一栄、青木宣明、芝沢成広『ボタン、シャクヤク』NHK出版 2004年
- 2) 中村浩『園芸植物名の由来』東京書籍 1998年
- 3) 宍戸純『フローリスト花図鑑 いちばん探しやすい』世界文化社 2014年
- 4) 熊坂一夫『神奈川県立フラワーセンター 大船植物園のわくわく花散歩』2019年
- 5) 大船フラワーセンター <https://httpshana.exblog.jp/> 2019年05月22日
- 6) 東京都立中央図書館(2110013) 国立国会図書館レファレンス共同データベース
- 7) 薬日本堂株式会社 Web サイト『漢方ライフ』 <https://www.kampo-sodan.com/>